

授業報告ノート～「視聴覚コミュニケーション実習Ⅰ・Ⅱ」

日本語日本文化学科・講師 原 良枝

1 はじめに

2017年度、甲南女子大学文学部日本語日文学科において、1年を通して「視聴覚コミュニケーション実習」を担当した。履修した学生は、3年生6人で、欠席はほとんどなく、真摯に課題に取り組み、成長が見えた。私自身、着任して初めての年度の授業であり、学生たちのレベルや使える設備などについてわからないことからスタートであった。就職活動戦線へ送り出す学生たちへ、この1年間で何を伝え、何を課し、何を伝えきれなかったのか。この授業の記録を報告しながら、授業を通して見えてきた課題について検討していきたい。(文中の下線は、課題を示す)

視聴覚コミュニケーション実習は、「アナウンス入門」「視聴覚コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」を履修した後に履修できる謂わば、仕上げの授業である。「アナウンサーになりたい」、「テレビ局(学生たちは放送局と言わず、テレビ局という言い方を好む傾向がある)で働きたい」、「番組の制作をしたい」という思いを抱いている学生たちの夢や目標を現実近づけるための武器を整え磨く場であると捉えている。そうであるならば、求められることは、アナウンサーや番組の制作者としてマスコミ業界へ入るための技術や知識、ものの考え方、業界の情報等を組み込んだ授業の展開であろう。加えて、私自身がこれまでのアナウンサー人生で学んできたことを余すところなく伝えるという、生身の人間の視点も重要である。それが、私がここにいる意味である。しかし、大学はアナウンス学院のような専門学校ではない。「創造」と「知の探究」の場としての大学において、その科目の特性を考えれば、アナウンサーやキャスターを目指すとは言いながらも一般的にイメージされるような、音声言語表現技術を教授するだけの場でないことは明白である。

「視聴覚コミュニケーション実習」では、どのような授業を行えばよいのか。その前に「視聴覚コミュニケーション」とは何を指すのか。この報告ノートでは、まず、「視聴覚コミュニケーション」の捉え方と、授業の大きな枠組みを示し、次に前期と後期の授業内容と素材を学生のリアクションを加えながら提示する。最後に授業を通して見えてきた課題を検討していくこととする。

2 「視聴覚コミュニケーション実習」が示すもの

2-1 「視聴覚コミュニケーション」の意味

「視聴覚コミュニケーション」とは何を指しているのでしょうか。視聴覚については視覚と聴覚で明白であるが、コミュニケーションの定義は一律にはいかない。「コミュニケーション論」ではないことから、一般的に解されているコミュニケーションの定義、「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・記号その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」という広辞苑(第6版)の解説に従う。

コミュニケーションとは、意識的にメッセージを伝えようとする行為であるが、情報やメッセージの受け手と送り手の経験識や知識量等の違いにより、メッセージは完全には伝わらない。だからこそ、視覚・聴覚に訴える各種のものをメディア（媒体）として伝えようとするわけである。そのメディアの代表格が「放送メディア」であり、さらにいえば、「テレビ」なのである。（「ラジオ」も当然「放送メディア」であるが、学生の年代では、聞いた経験すらないメディアという位置づけになっていることから、「ラジオ」は外した。）

さて、「視聴覚コミュニケーション」という場合、まず、(1) 視覚と聴覚へ訴える伝達行為、次に(2) これらの意識的な伝達行為をやはり視覚と聴覚を使い受け取る行為、という二つが存在する。(1) は、意識的な伝達行為の送り手であり、(2) は、意識的な伝達行為の受け手である。したがって「視聴覚コミュニケーション」という場合、私は、放送メディアの送り手＝アナウンサーも含む番組制作者・放送局と、放送メディアの受け手＝視聴者という双方からの視点を扱うことではじめて「視聴覚コミュニケーション」になりえると考えます。

では、授業において、送り手として学ぶべきことは、①放送メディア（特にテレビ）の特性の理解（NHK と民放における経営の差異も含む）②放送メディアでの仕事③放送メディア（テレビ）の存在意義④アナウンサーの役割が挙げられる。

放送メディアの仕事を理解する意味では、番組の制作過程の体験は有効である。しかし、編集実務に関しては、編集ソフトを使いこなせるスキルは重要ではあるが、編集作業を習得することが授業の目的ではないことから、学生が編集作業に充てる時間が多くならないよう配慮した。

授業では、放送メディアを全体的に把握した上で、アナウンサーという職業領域について詳しく論じていくことにした。内容は、a アナウンサーの仕事内容の理解 b 読む、聞く、書く、話す力の定着 c 共通語の必要性の理解とその習得 d 社会の出来事への関心 e 国語力と常識の研鑽 f アナウンサーの歴史の理解である。

昨今、テレビは報道機関であることより、エンターテインメントを供給するだけのメディアとして学生たちから認識されている傾向もあり、アナウンサーを目指す多くの学生が「情報番組」（注1）に憧れる状況にある。この傾向に対して是非を問うつもりはない。しかし、本来、アナウンサーは話のプロフェッショナルであると同時に、ジャーナリストという側面も合わせ持っている。否、むしろこれからは、女性の場合、アナウンサーという職業においてジャーナリストとしての資質を求められる可能性が高くなるだろう。なぜなら、当意即妙な受け答え能力を持っている芸人や、すでに話題性を持っているタレントとアナウンサーのボーダレス化が進む中で、果たして女性アナウンサーが活躍の場をどれだけ確保し続けていくのか、難しい局面に立たされているからである。

（注2）

フリーランスではない放送局の社員であるアナウンサーの立ち位置を確保できる場は報道である。新たな領域にアナウンサーが進出する可能性もあろうが、少なくとも「笑

顔」と「親しみ」だけが売りというアナウンサーは存在しない。アナウンサーの仕事の本質の部分、テレビが置かれている社会状況もろとも理解していかなければ、就職活動を進めるにしてもやるべきことがわからない状況に陥ってしまい、アナウンサーへの道のりは遠いものとなってしまいうだろう。

次に、放送メディアの受け手として学ぶべきことは、①ニュースの見方、作られ方②情報の偏りをなくし、比較の眼差しを持つこと③聞く力の涵養を挙げたい。

情報の取得に関しては、新聞を読まない、ニュースを見ない、見たとしてもネットニュースでの興味のある分野に偏向しているという学生が多い。甲南女子大学の学生に限ったことではないが、これは大変危険なことだ。情報を批判的に読み解く力を、放送メディアでの仕事＝送り手を目指す学生は十分に理解をしなくてはならない。

次に、これらの学ぶべきことを前提に授業で学生に課してきたこと、伝えてきたことを述べていきたい。

2-2 読む・聞く・話す力

履修した6人の学生は、当然のことであるが、目指すものも違い、個々の力にばらつきがある。アナウンサー、キャスターを目指してはいるが、制作や構成作家に関心を持っている学生もいる。そのことを踏まえて、前期の授業では、上記の送り手として学ぶべきことを最重要項目とした。中でも、「放送メディアの特性、仕事、存在意義の理解」と「アナウンサーの役割」についてとり上げることにした。同時並で、「読む、聞く、書く、話す力の定着」、「社会の出来事への関心」、「共通語の必要性の理解とその習得」、「国語力と常識の研鑽」の指導にも力をいれた。

言語生活の土台となる「読む、書く、聞く、話す力」の底上げと、社会への関心の度合いを上げ、人前で発言できるようになることは、社会人としても求められる力である。

・読む力

アナウンサーといえど「原稿を読む」姿がイメージされるであろう。説得力のある声で読むためには、アナウンサーとしての「声」が必要である。「声を作る」「声ができる」というような言い方をされる。

声を作るとは「声色」を使うということではない。ここでの「声」とは、聞きやすい、安定したトーンで読むことができる「声」を指す。アナウンスメントに適していると言われている「腹式呼吸」で、安定のある声を保ちながら読むのである。安定した「声」はすぐには作ることはできない。そのため、発声、発音、滑舌練習を日々積み上げていくよう指導してきた。

「声」に関する指導は、2年生までの間で当然、受けてきているはずであるが、継続するよう習慣化されていないため、「声」への意識化を強く促した。しかし、1年間を通してはなかなか実行されていない。一日3分でもよいのだが、どうすれば習慣化できるのか、課題の一つである。

音声表現としての「読み」は、ただ文章を音声化することではない。文章の骨格を見抜き、内容を瞬時に読み取ることが求められる。加えて、ニュースにはニュースの、ナレーションにはナレーションの読み方があり、一様ではない。授業においてはニュース、天気予報、ナレーション、CM、お知らせ、文学作品等、様々な分野の文章に多く接することで読み取る力を強化した。アナウンサーにとっての基礎的な「読む力」をつけるために、前期・後期を通して授業の軸として毎回必ず繰り返し実践してきた項目である。

癖のない読みができれば試験には通りやすい。癖とは、自分流のリズムで読んでしまう読み方である。例えば、ヘッドボイス（文頭の語句や単語の初めの音）や、「～は」「～が」等の助詞を強く発音する、意味のない抑揚に終始するという読み方を指す。癖については、本人は気持ちよく自分のリズムに乗り流暢に読んでいるため、自分ではなかなか気づくことができない。一度ついてしまうと身体化されているため、それを取り除くことは難しい。これを直すには、録音をして自分の読みを聞きながら、癖のない読みの練習を続けるしかない手立てがないのである。

アクセントにおいては、なかなか共通語アクセントに馴染めない学生も散見するが、これもさほど問題にはならない、許容範囲で読めている。アクセント辞典をこまめにひき、確認する読みを集中的に続ければ効果は上がるはずだ。鼻濁音、母音の無声化においても問題のある学生はいない。

・書く力

「視聴覚コミュニケーション実習Ⅰ・Ⅱ」だけでなく、「アナウンス入門」「視聴覚コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」においても毎回それぞれテーマを決め、スピーチをすることを課してきた。その際、しっかりと文章に起こすよう指導している。いくらその場で話すことができても、スピーチの原稿を書くことを疎かにすべきではない。まずは話の内容を決め、構成を考え、練習をしてスピーチに臨むことが理想である。短いスピーチほど難しいという例を挙げ、スピーチ終了時には必ず他の学生から講評をさせている。後期になり、全体的にスピーチの力はかなりつき、短時間で構成できるようになった。（スピーチのテーマは後述する）

それぞれの授業終了時には、リアクションペーパーを記入させ、添削を行い、翌週の授業で返却するようにしている。ここでは、授業の内容理解の定着といったクールダウンの効果はもとより、「書き言葉」と「話し言葉」の違いを徹底的に添削した。メールやラインの多用により、文字化されても話し言葉であるため、「～じゃない」、「～たんだけど」、「やばい」、「めっちゃ～」等の言葉使いが文書には適さない点を指摘している。

後期からは、就職活動を視野に入れ、ESを念頭に、自分を見つめる「棚卸し」をさせ、「自分の性格」「長所、短所」「自分の強み」「失敗から学んだこと」等を文章化したのち、話し言葉に変換して発表させた。学生の中には、要領よくそつなくこなせる学生もいるが、未だ自己紹介、自己PRの壁に突き当たっている学生もいる。どうすればよいのかを個々に指導しているが、悩み、格闘する時間も必要であると伝えている。

また、後期からは「作文」の指導も行い、社会で問題になっている事象や、抽象的な事柄を如何にとらえ、咀嚼し、わかりやすく伝えられるか、時間内に要点をまとめ記述できるように指導を試みた。作文は提出させ、添削した後返却をした。(作文のテーマは後述する)

・聞く力

アナウンサーは話のプロフェッショナルであるが、話す事と同等若しくはそれ以上に重要なことがある。「聞くこと」である。アナウンサーとは、テレビ番組の中の黒子である。アナウンサーとして個性と言われるものは当然必要ではあるが、出演者を引き立たせ、トークやインタビューにおいて、対象者の良さや核心に迫る話を聞きださなくてはならない。したがって自分ではなく、相手を前面に出す、相手を輝かせることがアナウンサーの仕事である。それには、人の話を聞く力がなければ務まらない。それと同時に、相手の話を瞬時にまとめてわかりやすく視聴者へ伝えることも要求される。理解力と言葉の変換力である。人の話しをよく聞いて、内容を理解しなくては番組をさばけないのである。

さらに、耳を傾けるという行為は、目の前にいる取材対象者や出演者に限らない。「耳を傾ける」という内容を広義に捉えれば、ジャーナリストの使命にも通じる。ジャーナリストとは、「誰も関心を持っていないけれど、実は多くが知るべき事実を発掘し、その存在が社会的に認知されていない(関心を持たれていない)ことで二重に虐げられているような弱者の声を拾い上げる」人を指す。ニュースを読むときでさえ、このニュースの背景や伝える意味を理解すべきなのである。

テレビアナウンサーがジャーナリストをそのまま名乗れるかどうかは、現時点では議論のわかれるところであろう。しかし、ニュース番組の花として、女性アナウンサーが天気予報や暇ネタを読む時代は終わった。ジャーナリストとしての視点こそがこれからの女性アナウンサーの道を開くパスポートになるはずである。

授業では、新聞記事を読み、大意をまとめ、自分なりに意見を言い合う練習や、他の学生のスピーチや課題に対する発表をメモを取って聞き、意見と質問を必ず述べることを毎時課してきた。通り一編の無難な感想や質問が多いのは否めないが、「ためになった」、「勉強になった」、「よかった」、「私も読んでみたい」等の感想は感想とみなさず、具体的指摘をするよう繰り返し指導してきた。しかし、この具体的に述べるのが困難であり、時には立ち尽くして言葉を失ってしまう学生もいた。後期になり、さすがにそのようなことはなくなったが、「なぜためになったのか」「どこが勉強になったのか」「なぜ良いと思ったのか」という段階まで思考を掘り下げるよう促した。しかし、掘り下げることに未だ馴染むことができない学生も目立った。

・話す力

アナウンサーとして電波媒体で話すという行為は、単なるお喋りではない。不特定多

数の視聴者を相手に、その場の目的やテーマに合わせて言葉を選びながら話をしなくてはならない。そのためには豊富な語彙力が必要であり、社会的な事象にも通じていなくてはならない。上述した通り、自分より相手を引き立たせることを考えながら話を展開していくことが求められる。

とは言え、アナウンサーは話しのプロフェッショナルであることに変わりはない。話ができるのは当たり前である。この授業では、スピーチのテーマを授業内で示し、毎回フリートークの収録を行った。後期には、いくつかのワードを書いたカードを用意し、そのカードをひかせその場ですぐにカードに書かれてあるワードについてスピーチを行った。はじめは自分の経験に引き寄せての内容を語ることにしたが、最終的には、自らの経験ではなく、ワードそのものについて3分間話すことを課して収録を行った。これは、実際のアナウンサー試験のカメラテストで行われているものであり、難易度は高いが挑戦させることにした。結果、自分の経験から話を敷衍していくことには慣れてきたが、経験以外でそのものについて3分間話すことはハードルが高かったようである。しかし、素晴らしいスピーチにつなげた学生も何人かおり、構成力と表現力の向上に目を見張る思いであった。

2-3 社会の出来事への関心

前期、後期通して、社会への関心の度合いを高めるための課題として、「気になるニュース」をスピーチのテーマとして提示した。また、6月からは1週間のうちの出来事を中心に問題形式で出題した。(内容は後述する)

時事問題の正答率の平均は30~40%であった。学生たちは、「ニュースは苦手」、「時事問題に関心がない」、「スポーツにも興味がない」という。しかし、ニュースに接しないアナウンサーやキャスターはいない。ニュースを伝えるのがアナウンサーの仕事である。彼女たちに、少なくとも、ネットニュースのヘッドラインだけでも見るよう指示はしたが、前期においてその効果は見られなかった。

指示をただけでは効果が上がらないという前期の轍は踏まぬよう後期には、新聞2紙を実際に読んで比較をするという課題を出し、発表をすることにした。比較する新聞は、大手5紙の中から、または、大手5紙のうちの1紙と地方紙1紙との比較でも良いとした。レジュメを切り、20分~30分間の発表を繰り返すうちに、「新聞とは、思っていたほど難しいものでもなく、面白い記事や、コーナーもある」ことに気付いたようだ。しかし、課題として仕方なく読むのではなく、読むことを持続するのは本人次第であり、未だ新聞ニュース苦手意識を払拭できない学生もいる。

学生にしてみれば、なぜ、新聞社へ入社するのではないのに新聞を読まなければならないのか、世の中の出来事やニュースになぜ触れなければならないのかという基本的な疑問があるのだろう。その疑問に答えを見出すためにも、情報の送り手である放送局の存在意義や在り方を理解することが必要である。

2-4 放送メディアの特性、仕事、存在意義の理解

放送メディアの特性の理解、仕事、存在意義については、①放送局の成り立ちとビジネスモデル②ネットワークの必要性③視聴率について④テレビニュースの見方、ニュースのつくられ方⑤メディアリテラシーの必要性の5回に分けて講義を行った。

「放送局は報道機関であり、エンターテインメントのためだけに存在しているのではない」ということを学生たちに理解させなくてはならない。ニュースを伝える局のアナウンサーやキャスターが、ニュースに対して苦手意識を持っているなどは考えられないことなのだ。ニュースに対して苦手意識を持ち回避しては、ニュースを伝える側にはなれない。

④に挙げた「ニュースが作られる」という言い方にはおそらく多くの方が違和感を持つであろう。しかし、ニュースは作られるのだ。もちろん、素材としての事件や事故、発言や出来事そのものを作るのではない。出来事の見せ方や切り取り方により、その出来事や素材は違うものになっていくという意味である。例えば、同じ部屋を映す場合でも、人が多いところを映すか、少ないところを映すか、全体を映すか、部分を映すかによって印象は変わってくる。ニュースは、ディレクター、カメラマン、デスク、レポーターという多くの人の目を通してニュースとして伝えられる。当然、人それぞれの立ち位置により出来事の印象や伝え方は変わってくる。多くの人の視点を通してニュースは語られ、他局とのニュースの重なり合いでまた伝え方が変わり、時には世論を形成していく。(注3) 報道ニュースの現場は、これから社会へ向かって発信される情報を精査する最前線である。「私は、情報番組やエンターテインメント志望だから報道は関係ない」という考えは通用しない。

キー局、地方局といっても規模が違うだけで公共の電波に乗るアナウンサーの仕事に違いはない。キー局や準キー局ではアナウンサーの人数も多いため、報道に携わらないアナウンサーも珍しくはない。しかし、地方局であれば、報道からスポーツ、芸能まで、なにから何までこなさなければならないのである。厳しいことを敢えて強調して学生に伝えているのではない。ニュース苦手意識がアナウンサーを目指す者にとってどういうことなのかを理解して欲しいのである。

ニュース苦手意識を払拭するためにも、メディアリテラシーを学ぶことが重要である。メディアリテラシーとは、「メディアにより映し出された出来事を批判的に読み解く能力」の事である。新聞記事の比較発表で、新聞が皆同じ内容でないのに驚いていた学生が多かった。新聞が皆同じ内容になった時は、言論が封殺されメディアが死んだ時なのだ。そういう認識を植え付けることが必要である。学生たちも臆気ながら「メディアリテラシー」の必要性は理解したようである。ここが、苦手なニュースに取り組む一つの突破口になることを期待している。

では、前期、後期の授業での素材とスピーチ、作文等のテーマについて具体例を述べていこう。

3 前期の授業の内容と素材

3-1 音声関連

音声を職業とする人の基礎学習

「発声」「発音（アクセント含む）」「鼻濁音」「母音の無声化」の4項目の強化
イントネーション・プロミネンス（卓立）・ポーズ・読みの緩急

音声関連としては、音声言語表現技術についてのまとめプリントを配布した。例文も載せ、練習しやすいように作成したが、あまり役には立たなかったようである。次年度は、さらに例文を多くし、発声、発音、滑舌練習と合わせたテキストのように編集をして活用しやすいものにして考えている。（音声言語表現技術に関する細かい内容は割愛する）

3-2 文章の構成

以下の資料は、お知らせ原稿の作成と発表の際の素材である。番組からのお知らせ原稿を素材だけ示し、そこから構成をして文章化し、発表するという内容だ。

ここで番組からのお知らせです。

4月4日から5月28日まで 千葉県 マザー牧場 TEL 0439-37-3211

2月中旬から4月中旬頃は菜の花が見頃 フルーツトマト狩り（黒トマトも有り）

春フェス2017 春の2大味覚狩り いちご狩り（期間限定いちごスイーツも有り）

赤ちゃん羊ふれあい写真館

（最後に）呼び込みコメント

アナウンス原稿の基本は、文章をわかりやすく伝えることである。この課題では、正解というものはないが、聞き手の立場になって情報の優先順位を考えることがポイントである。この課題は、4月の初めに提示したものだが、総じてよくできていた。

3-3 ニュースと天気予報

ニュース原稿と天気予報は、毎回その日の新聞やテレビニュース原稿を素材とした。

・東京・六本木の東京ミッドタウンの芝生広場に、長さ約25メートルの大型こいのぼりの内部を歩くアトラクション「こいのぼりくぐり」が登場し、多くの家族連れがカラフルな模様のトンネルを通り抜けていました。

・気象庁は25日、5～7月の3か月予報を発表しました。それによると、全国的に暖かい空気に覆われやすく気温は平年並みか高くなり、西日本の太平洋側では、降水量が平年並みか多くなるということです。

気象庁は「熱中症は早い時期から注意が必要です。大雨による災害にも注意をしてほしい」と呼びかけています。

上記の「こいのぼりくぐり」の一文は、文章は短いが難解である。しかし、短いものをしっかり読めるようになれば長い文章も自ずと読めるようになる。音声言語表現技術をどのように駆使して読めばよいのか、考えさせることから始めた。

リビアの治安当局は

24日、

イギリス中部マンチェスターの自爆テロの実行犯の弟を
首都トリポリで逮捕した

と明らかにしました。

治安当局によりますと、

逮捕された弟は、

自分と実行犯の兄が

過激派組織イスラム国のメンバーであることを自供し、

兄のテロ計画について

事前に知っていたということです。

5月には、この程度の長さのニュースを読めるようになっていった。これは、文章を分ち書きにしたもので、この通りに読めば読みやすい。

ニュースの読みについては、全体的にスピードが早いことが気にかかる。語尾までゆっくり、丁寧に読む指導を続けた。

3-4 スピーチとフリートークのテーマ

収録時に行ったスピーチと、フリートークのテーマの一部を抜粋する。

収録は、ニュースとスピーチ及びフリートークという組み合わせで行った。映像は、立って読む、座って読む、バーストショットや、全身映像、一人の場合、二人、複数の場合という具合に、パターンを変えた。プレビューしながら、表情、髪型、化粧、装い、歩き方、姿勢などをチェックした。映像を見ることで気づくことが多い。スタジオにある全身が映る大型の鏡も活用した。

「自己紹介」

「自分の好きなことを相手にわかるように伝える」

「最近気になること」

「言葉について思うこと」

「好きな一作」(本、映画、ドラマ、歌でも可)

「座右の銘、好きな言葉とその理由」

「甲南女子大学までの通学路を架空レポート」

「海」「空」「地球」「木」(語句カードをひかせ、2分間の即興スピーチ)

カメラテスト（注4）では、読みの内容だけではなく、表情や髪型を含む全身を評価される。学生たちは髪の色や前髪の長さのチェックに余念がなかった。

スピーチの時間は目安と3分間以内とした。学生たちは、当初1分間も話すことができなかったが、慣れるに従い3分という時間を身体で感じられるようになった。しかし、前期は、敢えて2分以内のスピーチに終始した。「甲南女子大学までの通学路を架空レポート」では、要領を得ず、時間をかなり費やした学生もいた。この架空レポートは、文章化をせずに臨んだためまとまりがつかなくなったからだ。

文章化についても、初めは全文を書かせたが、徐々に項目メモだけを書き、メモに肉付けをして話していくという作業に移行した。メモをとりながら話す事の訓練である。

語句カードからのスピーチは、連想的手法について講義した後の課題であるため、実に見事なまとめ方をした学生もいた。一方、連想ゲームがとりとめもなく続き收拾がつかない学生もいた。しかし、考え方の一つの方法を経験することがねらいであるため、ここで上手に話せずとも問題はない。

3-5 写真を読む

「読む」ものは文章とは限らない。前期では、写真を見て、そこから感じ取ったことを文章化し、発表を行った。素材は、緑色のアマガエルが5匹ゴーヤの茎にまるで家族写真のように行儀よく並んでいる写真である。（注5）

発表は、エッセイ風、ドラマ風、小説風のものがあり、実に面白い発表であった。苦戦するかと思ったが、意に反して実に自由に想像を巡らせ、表現化することができていた。特に、小説風の作品を発表した2名の学生は発想も文章も素晴らしく、完成度の高さに驚かされた。

3-6 放送において正しい言葉使いを意識するための言葉チェック（注6）

放送メディアで使われる「放送のことば」を意識させる課題である。昨今、放送メディアでの言葉使いでは、「言葉狩り」のような行き過ぎた面もあることは否めないが、不特定多数が視聴する放送メディアにおいては、視聴者へ配慮することは当然である。

・「～としています」という表現

「できるだけ早く会議を開きたいとしています」

⇒「会議を開く予定です」「会議を開く方針です」

～とするという言い方では、具体的な主語が誰かわからない。多用を避けたい表現。

・「～に迫る勢い」

「交通事故による死者は、早くも去年1年間の死者の総数に迫る勢いとなっています」

⇒「死者が1万人に達しました」「1万人に上りました」

よくないことばを伝える時、言葉を飾るような言い回しは避ける

学生にチェックをさせてみたところ、気が付く学生とそうでない学生に見事にわかれた。今後ニュースを聞く際、言葉使いや表現方法への注意を払うよう意識付けを行った。

3-7 紛らわしい言葉の意味

国語力と常識を試す問題である。敬語は、コンビニ敬語の流布により、誤った使い方にさらされている。尊敬語、謙譲語、丁寧語、美化語について復習を行い、随時指摘をしてきた。

下記の問題については、皆が正答率 50%以上であった。歳時記にある言葉や二十四節気の読み方も、折に触れ歳時記をめくるだけでも記憶されることから、ヴィジュアル歳時記を手取ることを勧めた。このような言葉チェックは前期で6回行っている。定着したのかどうかは確認していない。

(正しい言い方はどちらか)

- ・社長のような大役は私には(役不足・力不足)で務まらない
- ・雪辱を晴らす・雪辱を果たす
- ・～様は精力的に活動されております。 ～様は精力的に活動されておられます。
- ・なにげに・なにげなく

(正しい意味はどちらか)

- ・麦秋とは？ 初夏 ・ 秋
- ・徐に(読み方も) 不意に ・ ゆっくりと

3-8 時事問題

時事問題について、一つの問題について時間をかけて論じることはできない。話題になっていることや、なぜその話題が問題になっているのか、背景についての簡単な解説を6月から毎週、常識問題と併せて行った。

- ・参議院で実質的な審議が始まった新設法案の名前はテロ等_____である。
- ・アメリカのトランプ大統領は_____党の政治家である。
- ・文在寅韓国大統領の読み方は？
- ・他の人が吸うタバコの煙を吸うことを_____喫煙という。
- ・イギリスで昨年行われた国民投票は何を問うものでしたか？ _____からの離脱
- ・アメリカの議会制度は上院と下院の二院制であるが、読み方は？
- ・天皇退位後の呼称は？ _____
- ・北朝鮮金正恩委員長の読み方は？

こちらは正答率が低い。次年度からは、学生に問題を作らせるという手法で時事問題と取り組んでみたい。

常識問題

- ・日本の放送局の許認可を行っている省は？
- ・ITとは、なんの略語？
- ・高校野球の全国大会は、春の選抜と夏の大会では主催新聞社が違います。夏は朝日新聞主催ですが、春の選抜野球大会はどの新聞社の主催ですか？
- ・作家の忌日で、「桜桃忌」は誰の忌日ですか？
- ・「ヘイトスピーチ」について知っていることを述べなさい。

(読み方を問う)

・有島武郎 南方熊楠 北大路魯山人 天照大神 直木三十五 前島密
侃々諤々 順風満帆

～も一段落つきました。という場合の一段落は、何と読みますか

例えば、南方熊楠の読み方を問う問題では、単に読み方の確認だけで済まらずに、どういう人なのかを調べるという更なる一步を踏み出すことで、一般常識は蓄積されていくはずである。

3-9 番組企画と収録

前期のまとめとして、3つの班に分かれ15分の番組を企画し、収録を行った。その前に15分番組の「ポート330(さんさんまる)」というパイロット番組を作った。MCとして番組の進行を行いながらニュースやフリートークを織り交ぜ、授業内で実践しながらの緊張感を演出した。以下は「ポート330」の番組フォーマットである。

ポート330(さんさんまる)

- ・コンセプト：女性キャスター二人によるニュース番組
- ・時間：15時30分から15分 主な対象者層：在宅者 主婦・高齢者

番組冒頭あいさつ

MC①挨拶 こんにちは。名前～です。～です。では、最初のニュースです

MC① MC② (ニュース1本ずつ)

次にスポーツです。

MC① MC② (ニュース1本ずつ)

MC① 続いて、～さんの「最近気になる出来事」です。

MC②1分くらいフリートーク

MC① (受けてひとこと)

では、最後に兵庫県の天気予報です。

今日は、高気圧が遠ざかり南から湿った空気が流れこんだ影響で、気温が上がっています。これから、夜にかけて雲が広がり、明日の朝には雨が降る見込みです。

受けてエンディング

MC① では、ポート330 今日これで失礼します。

次に、このパイロット番組を参考にして、班で番組を企画演出し出演した。

- ・「昼ナン！」民放で流れている地域情報番組
- ・「えりかなこのドタバタ通信」Eテレで情報番組をやったら

3分間のカフェ取材VTRを流した班もあり、等身大の学生の姿が投影されていた。この二つの番組の企画においても「情報番組」というワードが躍る。学生たちにとって情報とは身の回りの半径30センチのものである。いくらか背伸びさせる必要があるのではないか。次年度は視点を広げていくよう指導していく。

4 前期の振り返り総括

前期の授業では、「音声言語表現技術の理解」、「アナウンサーの仕事と役割の理解」、「スピーチ、フリートークに慣れる」、「時事問題、国語常識への意識喚起」ということを60%ほど達成できたと評価したい。このまま、夏休みの間、持続してくれれば実力はつくはずである。また、休み中に本を20冊読みまとめるのもよい経験であると伝えた。しかし、実行はされなかった。次年度は、夏季休暇の課題を出すことを考えていきたい。

学生のリアクションペーパーからの感想を挙げ、前期のまとめとする。

*復習

30セント

*授業参加

できました。

*課題

時事問題

☆感想・意見

初回の授業では、フリートークが難しいと感じていましたが、

現在は、まだすらあつと作れるようになった気がします。

2年生の番組制作では一人で作成したため、グループでの作成が楽しみです。

また今日のホート330が緊張感がほど楽しくトークできた思いでした。時事問題は、首相の立場が他国と違って、いるので再度確認したいです。

ゼミ生!

5 後期の授業内容と素材

後期も前期同様に、音声関連の読みとフリートークの練習は授業の軸として収録という形で継続した。後期は、「本の紹介」、「新聞2紙の比較発表」、「作文」、「難解漢字200」を課した。講義として、「放送局の成り立ちと組織について」、「ネットワークについて」、「視聴率とは」、「テレビニュースの見方」、「メディアリテラシーの必要性」をテーマに7回に分けて行った。理解の程度を確認できなかったため、次年度は、レポートにまとめ意識づけを図ろうと考える。

5-1 本の発表

タイムリーなテーマがわかりやすく解説されている「新書」から興味のあるものを選び、内容や意見、感想等を発表させた。しかし、新書版を「新刊書」と捉えていた学生もおり、本選びが難航した。

発表するにあたり、レジュメをきかせたが、レジュメと発表が乖離してしまい、話がまとまらずレジュメの意味の理解をしていない学生も目に付いた。1冊の本をまとめて話すことは難しい作業であるが、互いの発表を聞くことで、刺激し合い、まとめ方や内容紹介の方法等、良いところを反映できるようになったことが成果として挙げられる。

学生が選び、発表した「本」は、以下の通りである。(発表順)

「シェアド・リーダーシップ～チーム全員の影響力が職場を強くする～」

石川 淳 中央経済社 2016

「まねるカー模倣こそが創造である」 朝日新聞社出版 斎藤 孝 2017

「死ぬほど読書」 丹羽宇一郎 幻冬新書 2017

「イスラム国の正体」 国枝昌樹 朝日新書 2015

「池上無双 テレビ東京報道の『下剋上』 福田裕昭+テレビ東京選挙特番チーム
角川新書 2016

「スポーツアナウンサー～実況の神髄～」 山本 浩 岩波書店 2015

「芸人最強社会日本」 太田省一 朝日出版社 2016

特に「イスラム国の正体」の発表の際には、知らないことに対する「恐怖」の中身、第二次世界大戦下における日本軍の「特攻隊」との比較など、興味関心はかつてないほど広がりを見せた。これらの問題提起について、その場で回収はできない。自分なりにテーマとして位置づけ勉強をするよう指示をした。しかし、残念ながら、せっかくの気づきを発展させた学生はいなかった。このような些細な気づきを大切にすることがマスコミへの第一歩である。次年度は、気づきの意識定着を促していくよう工夫をしていきたい。

5-2 スピーチとフリートーク

前期同様に後期も4限をビデオ収録に充て、フリートークに慣れることを重点目標とした。以下は、フリートークのテーマの一部である。

「最近の気になるニュース」(理由と共に)

「ピザとピッツアの語感から考えられること」

「人生最大のピンチについて」

「私の20歳の人生論」愛 希望 夢 円満な家庭 自由 信条 お金 仕事 友情 地位
名誉 健康 遊びから上位5つを選び話す

「自分の価値観を変えた出来事について」

即興スピーチ①「風」「箸」「雨」「机」(ワードを引き、即興で1分間スピーチを行う)

即興スピーチ②「天井」「紙」「北」「壁」(ワードを引き、即興で3分間スピーチを行う)

今の自分を見つめ、ES 記入の手がかりにもつながるのではないかと考え、「私の 20 歳の人生論」というテーマを選んだ。学生たちは、体裁に捕らわれることなく正直に自らを語り、また、互いのスピーチを聞くことで共感が生まれた。

テレビの画面は、時には人間の心内まで映しだしてしまう。どこまで自分をオープンにできるのか、勇気のいることである。テレビに出るということは覚悟を伴うことなのである。

即興スピーチ①では、自分にまつわる記憶や出来事を織り交ぜて語るようにした。思い出の品や、過去のシーンを引き出してのスピーチとなり、総じてよくできていた。ポイントは、話しのつなげ方である。何を語り、何を語らないか、という点である。だらだらとお喋りにならないよう落としどころを見つけるよう指導をした。

即興スピーチ②では、自分との関わり合いではなく、言葉が示すものそのものについて話すようハードルを上げた。例えば、「天井」なら、ヒラリークリントンのガラスの天井発言から、女性の社会進出や働き方を、「北」であれば、昨年 1 年を表す漢字 1 文字が発表された直後であったから、昨年を振り返る、あるいは漢字そのものへの知識を話すというように、出題の意図を想像する姿勢が必要である。したがって、出題の本意とアプローチの仕方を指導した。さすがに即興スピーチ②は、難易度が高いものであったが、3 人の学生は工夫を凝らして話をつなげることができた。特にそのうちの一人は、「出生届、結婚届け、借用書など、私たちの人生は、紙 1 枚が大きな意味をもつことがあります」という見事なスピーチを行ったが、やや時間が短かった。しかし、さらに続きが聞きたいと思わせる内容であった。

5-3 新聞 2 紙比較発表

新聞を読む習慣のない学生たちに、新聞の面白さを知ってもらうことを狙いとした。比較した新聞は以下の通りである。

「四国新聞」「朝日新聞」・「朝日新聞」「読売新聞」・「神戸新聞」「産経新聞」 「朝日新聞」「毎日新聞」・「読売新聞」「日本経済新聞」・「読売新聞」「産経新聞」
--

「同じ記事でも書いた人によって文章が全く違うのが面白い」、「同じニュースでも取り上げ方や視点が異なる」、「広告がどちらの新聞も思っていたより多かった」、「一つの記事を見たからとそれにとらわれない過ぎないことが大事」という感想があった。

次年度は、比較の仕方も様々あることを具体的に指示し、深く考えることができるようにテーマを絞って読む方法を提示してみたい。

5-4 図書館のイベントの取材

2017 年 10 月 23 日～27 日にかけて、甲南女子大学の図書館の第一貴重書展示室において「見る知る愉しむ知の世界 ヘルマンヘッセ」が、第二貴重書展示室において、「謎

解き浮世絵見立て三十六句撰」が公開された。これに伴い、10月25日の授業時間内に3班に分かれてビデオ取材を行った。

後期の仕上げとして15分番組の収録を予定しており、その番組の特集コーナーの取材という位置づけである。VTRの時間は3分間以内とし、それぞれの班で演出を凝らすよう指示をした。結果、オーソドックスなレポート、問題形式、参加型のレポートと工夫が凝らされていた。

取材を通して、たとえ短い取材であっても、テーマを立て、入念な事前準備が不可欠であることを理解したはずだ。番組取材でのレポートは、記録ではなく見せるものである。不特定多数の視聴者に伝えるための見せ方を考えることが狙いだ。言葉と映像の「宛先」を念頭に置かなくては取材はできないのである。(編集したVTR3本は、DVDにまとめ図書館へ提出した)

5-5 作文テーマ

作文は、400字～800字以内とした。内容は以下の通りである。

「放送メディアと私」

「放送を通して伝えたいこと」

「あなたが作りたい番組を具体的に述べる」

「私が考える常識とは」

新聞記事を読み「メディアとジェンダー」について考える

(「2017年9月25日付 朝日新聞朝刊 フォーラム ジェンダーとメディア」)

アナウンサーに限らず放送局の作文のテーマとして、「放送メディアと私」、「放送を通して伝えたいこと」の記述はどこでも必ず聞かれるテーマだ。できる限り具体例を引いて書くべきである。1年間を通して具体の重要性について触れてきたが、具体例を引くことに慣れたとは言い難く、伝えきれなかった課題である。次年度はこの点をさらに指導していこうと考える。

5-6 写真で実況レポート

1枚の写真を見て、生番組の入り中継として、その場所から実況レポートをするという設定で収録を行った。いくつかの本物の情報を与えそれを組み入れながら、想像力を存分に働かせ、構成力を鍛えることが狙いである。

情報

- ・場所：青森県黒石市郊外 八甲田山連峰の山すそ位置する「中野もみじやま」
- ・情報：1キロの遊歩道 紅葉散策 夜はライトアップされる 溪流や滝がある
紅葉の見頃は10月中旬から11月上旬
- ・実況時間：3分間 スタジオのMCからの呼びかけに答える設定



(しんぶん赤旗日曜版2017年
10月22日)

鮮やかな紅葉、滝の音、肌にあたる風、匂い、水の冷たさ等、五感に訴える実況レポートが続出した。「歩いている人にインタビュー」、「水の冷たさを手を入れてコメントする」、「ドローンを飛ばして空から実況」という想像力の溢れた素晴らしい内容のレポートであった。学生たちは互いのレポートに批評を加え、翌週の授業で、指摘を受けた箇所を修正し、再度収録を行った。

フリートークが得意で現場からのレポートに力を発揮できる学生、読みを正確に行うことができる学生、臨機応変に読みも、フリートークも、レポートも平均的にこなせる学生というようにジャンルによる得手不得手を知ることができた。個性化が進んできたと思わせる発表であった。

5-7 難解漢字チェック 200 問

繰り返しになるが、マスコミ業界への就職において重要なのは、国語力と常識である。アナウンサーの場合、漢字検定2級レベルは当然である。難解漢字は読める程度で構わないので一度は取り組むべき課題である。

アナウンサーとして読めるようにしておきたい難解漢字の中から200を選び、読みの確認をしたところ、正答率は20%程度であった。このようなものは、隙間時間で身につくものであることから、解説等を行わず、自習するよう課した。2週間後に自習の成果を尋ねたが、勉強してきたのは一人であった。次年度は、前期から少しずつ積み重ねていくようにしたい。

5-8 最終番組制作

前期にパイロット番組として収録した「ポート330」を後期のまとめ試験と位置付けた。今回は、15分という時間を守ることと、月曜、火曜、水曜と曜日を仮定して、番組に連続性を持たせた。特集は「図書館の貴重書展の取材」であり、編集したVTRは3分以内に収め、後の番組の内容は各班でオリジナル企画を立てることにした。

リハーサル、収録、本番の段階で互いに評価するという流れを作り、修正を重ねていった。番組の送り手からの視点を忘れないよう、何をどのように伝えていくかという点を押さえながら番組は進めるものだという点を強調した。

内容は、本の紹介を入れた班、占いを入れた班、ぬいぐるみと天気予報を伝えた班、というように女子学生らしい等身大の企画であった。自分たちが選んだニュースも2本ずつ入れていることから番組の体裁は保つことができた。しかし、企画といえば、食べ物とファッションとホットスポット紹介に終始する。ここから抜け出すことはできないだろうか。それらが決して悪いということではない。確かにジャーナリスティックなものを入れることは敷居が高いかもしれないが、食べ物ならなぜその食べ物に人気が集まっているのか、ファッションなら流行の繰り返しという視点からなにか探ることはできるはずである。情報の後追い羅列から一頭地抜け出せないと、マスコミの試験を勝ち抜くことは容易ではない。情報を批判的に読み取る力が送り手にも必要な所以はここにある。

6 後期の総括

後期最後の授業では、前期1回目で行った自己紹介のVTRをプレビューし、互いの成長の姿を確認した。

4月には、ほとんどの学生が、自分の名前を言う際に「〇〇～です↑」と語尾が上がってしまっていた。一見些細なことだが、この一声だけで幼稚に聞こえてしまい、それから先の読みが聞かずとも想像できる。大きなマイナスなのである。さすがに最終回では語尾が上がる学生はいなくなった。日常生活でも意識をもって話しをすることが重要だ。1年間、「姿勢を正して、ゆっくり、自信をもって具体例を入れてわかりやすく話すこと」を繰り返し伝えてきた。これがアナウンサーとして話すときの要諦である。

以下、後期のリアクションペーパーの一例を示し後期の総括としたい。

☆質問・意見・感想

自分達の作ったVTR(特集と占い)が自分も見てる側も楽しかったし、BGMも入るまでが良かったので、とてもやりがいのあった授業でした。

毎度器材を使って実際に撮ったり自分でアイトークをしたり今までの新しい授業で、アクトブライニングだったので

とても身につきました。見た目の映像に比べて、1人1人木になると成長したし、自信もついていて

この授業で得たものが大きかったです。

1年間ありがとうございました。

得たものを活かして夢を叶える努力をします!!

夢は叶えたい
叶えたい!!

6 おわりに

学生たちは、積極的に授業に参加し、課題への取り組み姿勢も評価できるものであった。私自身が局アナの時代に作成した試験形態を参考に、学生たちへ課題を課してきた。毎週、本物のスタジオセットさながらの教室で収録を行い、翌週にプレビューする方式は力をつけるには最適である。学校の設備と、スタジオスタッフの方の存在がそれを可能にしている

1年を通して、理解しきれなかったことや技術レベルの伸びがあまり見られなかった部分もある。しかし、特に後期はレベルの高い課題をこなしてきたことから、学生たちに対して、自信を持つべきであると声をかけてきた。後期の勢いを前期から引き出していればさらに力が付いたのではないかと考えている。この点は、次年度への課題と受け止めている。

学生たちが目指すアナウンサーの資質とは如何なるものか。時代の流れの中でテレビに寄せられる期待や要求に伴い求められるものはある程度は変化していくことだろう。しかし、アナウンサーが言葉のプロフェッショナルであることに変わりはない。言葉で、目の前の出来事をわかりやすく不特定多数の視聴者へ向けて伝えていくのが、アナウンサーの仕事である。

伝えるためには、「内容の理解力」、「まとめる力」、「諸処の知識をつなげて考える力」が必要である。これらを養うにはどのようにしていけばよいのだろうか。自らが進んで自分の中で湧出する疑問を蔑ろにせず明らかにしていくことが重要だ。自分の言葉で文章を書いてみることも良い。「大丈夫」「頑張る」「～して良かった」等という安易な言葉で済まさず、言葉を探していくことの積み重ねがその人の言葉を作っていく。書いてみなければ文章力も上がらない。わからない言葉や出来事を、一つでもよいからテーマを設定し調べ進んでいけば、地平は開けてくるはずである。

次年度の授業では、「視聴覚コミュニケーション」という言葉が示している意味を解き明かしながら、少しずつ興味の視点を半径 30センチの身の回りの世界から、マスコミで働くことを射程に入れ、視野を広げさせることを目標としたい。

それを可能にするために問われているのは、授業の素材の精査と教師としての私の「伝える力」である。学生以上に「伝える力」そのものが試されているのは他でもない、私自身であることを痛感している。

(注)

(1) 情報番組 (Information program) とは、何らかの情報を提供することを目的としたテレビ番組の一種、およびワイドショーの別称。1999 年からワイドショーの報道化が進み、2000 年以降からニュース番組の番組構成にてワイドショーで扱うソフト・ニュースを含むようになった。情報番組には、朝の情報番組、ワイドショー、生活情報番組、バラエティ番組と融合させた「情報バラエティ」等に分類されている。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/情報番組>より引用

(2) 男性アナウンサーの場合は、スポーツ実況という高度な技術の分野があるが、男性アナウンサーのスポーツ実況に匹敵するような分野が女性アナウンサーにはない。そういう意味で、女性アナウンサーは活躍の分野が限られてしまう。

(3) マスメディアで、ある争点やトピックが強調されればされるほど、その争点やトピックに対する人々の重要性の認知も高まる状況のことで、アジェンダセッティング（議題設定効果）といわれる。

(4) カメラテスト 何段階にも分けて実施されるアナウンサー試験で、多くの場合、最終面接の前に行われる実技試験の事。実際に使われているスタジオのカメラの前で、読みやフリートークが試される。担当番組が予め決まっているような場合は、使われているセットの中で他のMCとの映りのバランスなども評価される。

(5) 朝日新聞発行の「スタイルアサヒ」2017年6月号に掲載されたカラー写真。

(6) 日本新聞協会新聞用語懇談会放送分科会が発行している「放送で気になる言葉2011」（社団法人日本新聞協会 2011年）参照。